

## 鶏をかたどった 土製品



### ●コレクション・データ

時代：弥生時代 後期  
調査：唐古・鍵遺跡 第11次調査  
発見年：1981年  
大きさ：高さ11.1cm・顔幅4.1cm  
展示位置：第1室・「まつりといのり」

鶏は朝の到来を告げる鳥として、日本人には馴染みの深い家畜です。鶏は大陸から運ばれた家畜の一つで、約6,000年前に、東南アジアから中国南部で家畜化されたと考えられています。

「日本には、いつから鶏がいたのか？」今回、紹介する資料は、この問題を解く重要な鍵になっています。縄文時代の貝塚から鶏の骨が出土したという古い調査例もありますが、今では疑問視され、確実な資料は弥生時代の鶏をかたどった土製品になります。

唐古・鍵遺跡出土の鶏形土製品は、立派な鶏冠や大きな嘴、目、耳朶が表現され、一見して鶏とわかる良好な資料です。その精悍な顔立ちは、日本にもたらされた当初の鶏を彷彿とさせ、弥生の人の造形美には驚かせられます。この土製品は頭部から下が細い棒状になっており、別作りの胴部に頭部を差し込んで一体としたもので復元すれば、

実物大ぐらいの大きさになるでしょう。

ところで、鶏の肉や卵が食用とされたのは、江戸時代以降と考えられています。近年、広島県草戸千軒遺跡では、食用にされたと思われる鶏の大腿骨が出土しましたが、やはり中世以前には遡らず、鶏を食べるということは比較的新しい風習です。

『古事記』では、時を告げる「常世の長鳴鳥」として登場し、鶏は神聖な鳥と考えられていたようです。また、平安時代の絵巻物には、闘鶏の場面がみられますが、『日本書記』雄略紀にも、占いを闘鶏の勝敗で判定したとの記事があります。古墳時代にも鶏形の埴輪があり、祭祀的な目的で使用されたことがうかがえます。

こうした鶏の扱われ方が、弥生時代まで遡るのであれば、動物の家畜化が単なる食用にとどまらず、祭祀や精神文化に関連するものとして注目されます。

唐古・鍵考古学  
ミュージアム  
【 ☎ 34・7100】

開館時間 午前9時～午後5時（月曜は休館）  
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）  
▼大人 2000円（1500円）  
▼高校生・大学生 1000円（500円）

ミュージアム上面図と展示位置

